

みじかい木ペン

宮沢賢治

青空文庫

キツコの村の学校にはたまりがありませんでしたから雨がふるとみんなは教室で遊びました。ですから教室はあの水車小屋ごやみたいふるくさな古臭い寒天かんてんのような教室でした。みんなは胆取りきもとと巡査じゆんさにわかれてあばれています。

「遁げだ、遁げだ、押えろ押えろ。」「わあい、指嚙ゆびかじるこなしだであ。」

がやがやがたがた。

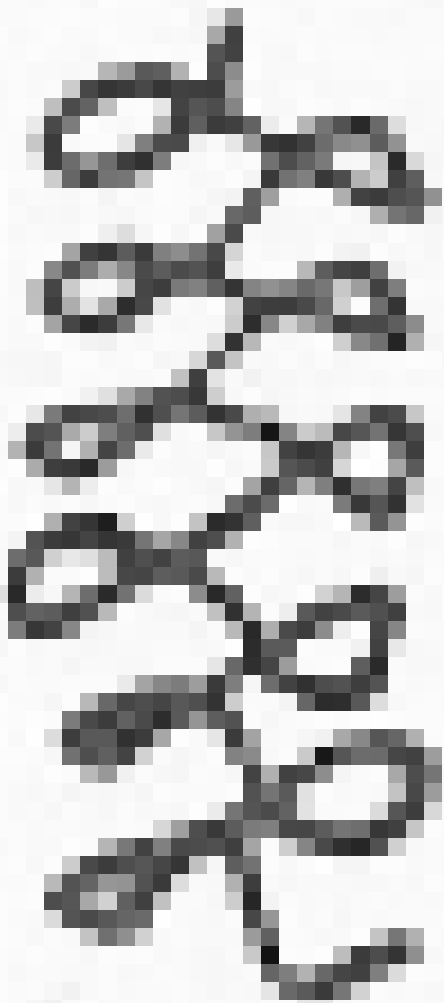
ところがキツコは席せきも一番前のはじめで胆取りにしてはあんまり小

さく巡査にも弱かったものですからその中にはいりませんでした。机つくえに座すわつて下を向むいて唇くちびるを噛かんでにかにか笑わらいながらしきりに何か書いているようでした。

キツコの手は霜しもやけで赤くふくれていました。五月になつてもまだなおらなかつたのです。右手のほうのせなかにはあんまり泣ないて潰つぶれてしまった馬の目玉のような赤い円いかたがついていました。

キツコは一すん寸ばかりの鉛筆えんぴつを一いっしょう生せいけん命めいにぎつてひとりでにかにかわらいながら8の字を横よこにたくさん書いていたのです。

(めがね、めがね、めがねの横めがね、めがねパン、くさりのめがね、)とところがみんなはずいぶんひどくはねあるきました。キ



ツコの机はたびたび誰かにぶつつかられて暗礁に乗りあげた船のようにながたとゆれました。そのたびにキツコの8の字は変な洋傘の柄のようになつたりしました。それでもやつぱりキツコはにかにか笑つて書いていました。

「キツコ、汝の木ペン見せろ。」にわかには巡查の慶助が来てキツコの鉛筆をとつてしまいました。「見なくてもいい、よごせ

。」「キツコは立ちあがりましたけれども慶助はせいの高いやつでそれに牛若丸のようになしろの机の上にはねあがつてしまいましたからキツコは手がとどきませんでした。「ほ、この木ペン、この木ペン。」慶助はいかにもおかしそうに顔をまつかにして笑つて自分の眼の前でうごかしていました。「よごせ慶助わあい。」

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
841
842
843
844
845
846
847
848
849
850
851
852
853
854
855
856
857
858
859
860
861
862
863
864
865
866
867
868
869
870
871
872
873
874
875
876
877
878
879
880
881
882
883
884
885
886
887
888
889
890
891
892
893
894
895
896
897
898
899
900
901
902
903
904
905
906
907
908
909
910
911
912
913
914
915
916
917
918
919
920
921
922
923
924
925
926
927
928
929
930
931
932
933
934
935
936
937
938
939
940
941
942
943
944
945
946
947
948
949
950
951
952
953
954
955
956
957
958
959
960
961
962
963
964
965
966
967
968
969
970
971
972
973
974
975
976
977
978
979
980
981
982
983
984
985
986
987
988
989
990
991
992
993
994
995
996
997
998
999
1000

キツコは一生けん命のびあがつて慶助の手をおろそうとしましたが慶助はそれをはなして一つうしろの机つくえにげてしまいました。そして「いがキツコこの木ペン耳さ入るじやい。」と云いいながらほんとうにキツコの鉛筆を耳に入れてしまったようでした。キツコは泣いて追おいかけましたけれども慶助はもうひらつと廊下ろうかへ出てそれからどこかへかくれてしまいました。キツコはすっかり気き持もちをわるくしてだまつて窓まどへ行まどつて顔を出して雨だれを見ていました。そのうち授じゆぎ業ようのかねがなつて慶助は教室に帰つて来遠くからキツコをちらつとみましたが、またどこかであばれて来たわすとみえて鉛筆のことなどは忘わすれてしまったという風に顔をまつかにしてふうふう息いきをついていました。

「わあい、慶助、木ペン返せじや。」キツコは叫びました。「知らないじや、うなの机さ投げてたじや。」慶助は云いました。キツコはかがんで机のまわりをさがしましたがありませんでした。そのうちに先生が入って来ました。

「三三郎、この時間うな木ペン使つてがら、おれさ貸せな。」キツコがとなりの三郎に云いました。

「うん、」三郎が机の蓋をあけて本や練習帖を出しながら上のそらで答えました。

課業かぎようがすんでキツコがうちへ帰るときは雨はすつかり晴れていました。

あちこちの木がみなきれいに光り山は群ぐんじよう青せいでまぶしい泣なき笑わら

いのように見えたのでした。けれどもキツコは大へんに心もちがふさいでいました。慶けいすけ助すけはあんまりいばっているしひどい。そ

れに鉛筆えんぴつも授業じゆぎようがすんでからいくらさがしてももう見えな

かったのです。どの机つくえの足もとにもあのみじかい鼠ねずみいろのゴムの

ついた鉛筆はころがっていませんでした。新学期しんがつきからずうつと

使つかっていた鉛筆です。おじいさんと一いっしょ緒しよに町へ行いって習字手しゆうじ

本や読方の本と一緒に買かって来た鉛筆でした。いくらみじかくなつたってまだまだ使つかえたのです。使つかえないからつてそれでも面おもし

白しろい鉛筆えんぴつなのです。

キツコは樺かばの林の間を歩きました。樺はみな小さな青い葉はを出しすきとおった雨の雫しずくが垂たれい匂においがそこらいつぱいでした。おひさまがその葉をすかして古めかしい金いろにしたのです。

それを見ているうちに、

(木ペン樺かばの木に沢山うんとあるじゃ)キツコはふつとこう思いました。けれども樺の木えだの小さな枝には鉛筆ぐらいの太さのはいくらでもありますけれども決けつして黒い心こゝろがはいってはいないのです。キツコはまた泣なきたくなりました。

そのときキツコは向むこうから灰はいいろのひだのたくさんあるぼろぼろの着物きものを着た一人のおじいさんが大へん考え込んでこつちへ来る

のを見ました。(あのおじいさんはきつと鼠捕りだな。)キツコは考えました。おじいさんは変な黒い沓をはいていました。そしてキツコと行きがちがうときいきなり顔をあげてキツコを見てわらいました。「今日学校で泣いたな。目のまわりが狸のようになっているぞ。」すると頭の上で鳥がピーとなきました。キツコは顔を赤くして立ちどまりました。

「何を泣いたんだ。正直に話してごらん。聞いてあげるから。」鳥がまた頭の上でピーとなきました。するとおじいさんは顔をしかめて上を向いて「おまえじゃないよ、やかましい、だまっておいで」とどなりました。

すると鳥はにわかにはいんとなくなってそれから飛んで行ったらしく

ぼろんという羽の音も聞え樺の木からは雫がきらきら光って降り
ました。「いつてごらん。なぜ泣いたの。」

おじいさんはやさしく云いました。「木ペン失ぐした。」キッコ
は両手を目にあててまたしくしく泣きました。「木ペン、なく
した。そうか。そいつはかあいそうだ。まあ泣くな、見ろ手がま
つ赤じやないか。」

おじいさんはごそごその着物のたもとを裏返しにしてぼろぼろ
の手帳を出してそれにはさんだみじかい鉛筆を出してキッコ
の手に持たせました。キッコはまだ涙をぼろぼろこぼしながら見
ましたらその鉛筆は灰色でごそごそしておまけに心の色も黒で
なくていかにも変な鉛筆でした。キッコはそこでやっぱりしく

しく泣いていました。「ははああんまり面白くもないのかな。まあ仕方ない、わしは外に持つていないからな。」おじいさんはすつと行ってしまいました。

風が来て樺の木はチラチラ光りました。ふりかえって見ましたらおじいさんはもう林の向うにまがつてしまったのか見えませんでした。キツコはその枝きれみたいな変な鉛筆を持つてだまつてかくしに入れてうちの方へ歩き出しました。

三

次の日学校の一時間目は算術でした。キツコはふとああ木ペ

ンを持っていないなと思いました。それからそうだ昨日きのうの変な木
ペンがある。あれを使つかおう一時間ぐらいならもつだろうからと考
えつきました。

そこでキツコはその鉛筆を出して先生の黒板こくばんに書いた問題もんだいを
ごそごその藁紙わらがみの運算帳うんざんちように書き取りとりました。

48×62＝ 「みなさん一けた目のからさきにかけて。」と先生が
云いいました。「一けた目からだ。」とキツコが思ったときでした。
不思議ふしぎなことは鉛筆がまるでひとりでうごいて96と書いてしま
いました。キツコは自分の手首だか何だかもわからないような気が
して呆あきれてしばらくぼんやり見ていました。「一けた目がすんだ
らこんどは二けた目を勘かんじよう定じようして。」と先生が云いいました。す

るとまた鉛筆がうごき出してするするつと288と二けた目までのところへ書いてしまいました。キツコはもうあんまりびつくりして顔を赤くして堅かたくなつてだまつていましたら先生がまた「さあできたら寄よせ算をして下さい。」と云いました。またはじまるなど思つていましたらやつぱり、もうただ一いきに一本の線もひつぱつて2976と書いてしまいました。

さあもうキツコによるこんだことそれからびつくりしたこと、何と云つていいかわからないでただもうお湯ゆへ入ったときのようにじつとしていましたら先生がむちもを持って立つて「では吉三郎きちさぶろうさんと慶けいすけ助すけさんと出て黒板こくばんへ書いて下さい。」と云いました。「キツコは筆記帳ひっきちようをもつてはねあがりました。」そして教きょうだ

壇へ行ってテーブルの上の白墨をとつていまの運算を書きつけたのです。そのとき慶助は顔をまっ赤にして半分立ったまま自分の席でもじもじしていました。キツコは6の字などはどうも少しなまずのひげのようになってうまくないと思いつながらおりて来たときようやく慶助が立って行きましたけれども問題を書いただけであとはもうもじもじしていました。

先生はしばらくたって「よし」と云いましたので慶助は戻つて来ました。先生はむちでキツコの説明しました。

「よろしい、大へんよくできました。」キツコはもうにがにがににがわらつて戻つて来ました。（もう算術だつていつこうひどくない。字だつて上手に書ける。算術帳とだつて国語帳と

だつて雑作ぞうさなく書ける)

キツコは思いながらそつと帳ちようめん面をみんな出しました。そして

算術帳国語帳理科帳とみんな書きつけました。すると鉛筆えんぴつはま

だキツコが手もうごかさないうちにじつに早くじつに立派りっぱにそれ

を書いてしまうのでした。キツコはもう大おお悦よろこびでそれをにが

にがならべて見ていました。がふと算術帳と理科帳と取りちがえて

書いたのに気がつきました。この木ペンにはゴムもついていたと

思いながら尻しりの方のゴムで消そうとしましたらもう今度は鉛筆こんどが

まるで踊おどるように二、三べん動うごいて間もなく表紙ひょうしはあとに残のこさ

ずきれいになってしまいました。さあ、キツコのよろこんだこと

こんないい鉛筆をもっていたらもう勉べんきよう強も何もいらぬ。ひ

とりでどんどんできるんだ。僕はまず家へ帰ったらおつ母さんの前へ行つて百けたぐらいの六かしい勘定を一ぺんにやつて見せるんだ、それからきつと図画だつてうまくできるにちがいない。僕はまず立派な軍艦の絵を書くそれから水車のけしきも書く。けれども早く耗つてしまふと困るなあ、こう考えたときでした鉛筆が俄かに倍ばかりの長さに延びてしまいました。キツコはまるで有頂天になつて誰がどこで何をしているか先生がいま何を云つてゐるかもまるつきりわからないという風でした。

その日キツコが学校から帰つてからののはしやぎようと云つたら第一におつかさんの前で十けたばかりの掛算と割算をすらすらやつて見せてよろこばせそれから弟をひっぱり出して猫の顔を

写生しやせいしたり荒木又右工門あらきまたえもんの仇討あだうちのどこを描かいて見せたりそしておしまいもうお話を自分でどんどんこさえながらずんずんそれを絵にして書いていきました。その絵がまるでほんものようでしたからキツコの弟のよろこびようと云つたらありませんでした。「さあいいが、その山猫やまねこはこの栗くりの木がらひらつとこつちさ遁にげだ。鉄砲てつぽう打うちちはこうぼかげだ。山猫はどうとうつかまって退た治いじされた。耳の中にこう云う玉入たまいりっていた。」なんてやっていた。

そのうちキツコは算術も作文もいちばん凶画きゆうがもうまいので先生は何べんもキツコさんはほんとうにこのごろ勉強べんきやうのため出来るようになったと云いったのでした。二学期にがつきには級きゆう長うちようにさえなつた

のでした。その代りもうキツコの威張りようと云つたらありませ
 んでした。学校へ出るときはもう村中の子供らをみんな待たせて
 置くのでしたし学校から帰つて山へ行くにもきつとみんなをつれ
 て行くのでうちの都合や何かで行かなかつた子は次の日みんなに
 撲らせました。ある朝キツコが学校へ行こうと思つてうちを出ま
 したらふとあの鉛筆がなくなっているのに気がつきました。さ
 あキツコのあわて方つたらありません。それでも仕方なしに学校
 へ行きました。みんなはキツコの顔いろが悪いのを大へん心配
 しました。

算術さんじゆつの時間でした。「一ダース二十銭せんの鉛筆を二ダース半で
 はいくらですか。」先生が云いました。みんなちよつと運算うんざんし

てそれからだんだんさつと手をあげました。とうとうみんなあげ
ました。キツコも仕方しかたなくあげました。「キツコさん。」先生が
云いました。

キツコは勢いきおいよく立ちましたがあともう云えなくなつて顔を赤くし
てただもう「以下原稿なし」

青空文庫情報

底本：「イーハトーボ農学校の春」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年3月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2009年8月23日作成

2011年11月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

みじかい木ぺん

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>